

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

葛城市柿本のチンボンカンポン祭と柿本人麻呂の歌塚から始まり、天理市櫻本にも人麻呂の歌塚があることを紹介した。葛城市的歌塚は、当時の郡山藩主が墓碑を建て、幕府大学頭の儒者が文章を書いた。その内容は、寛政3年(1791)刊の『大和名所図会』に収載されている。櫻本の碑文も読み取ろうと二度にわたって目を凝らしたが、刻字は風化と剥落で十分には読めなかつた。

この碑は柿本寺の僧と森本宗範が建てたもので、撰と書は山城伏見の仏国寺の百拙元養、「歌塚」の揮毫は後西天皇の皇后だった。

森本宗範は式下郡大木村(現田原本町)の医者で歌人。その事績は白井伊佐牟氏の「森本宗範と歌塚」(『歴史文化への視座』山の辺文化会議刊)という労作に詳しい。

人麻呂崇拜と柿への思い

文は同書や斎藤茂吉の『柿本人麻呂』総論編に収録されている。人麻呂は平安時代前期に編さんされた最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の序文で「歌の聖」と評されていることは既に記したが、この「ひじり」は単に優れた歌人という意味にとどまらず、抜きんでて優れ、尋常ではない能力を發揮する人と人麻呂が見なされ、早くから伝説化、神聖視された。人麻呂の直感力や表現力など類いまれな歌にまつわる個人的な資質に対する称賛の背景には「柿本」という姓の由来である。

柿のヘタでイボが取れるとしたり、シャックリが治るともいう。秋にあり独特的の深い柿色の実があると、来年のために一つだけ残して「木守り」とすることもある。

1983年に月ヶ瀬で奈良晒(さかづけ)という麻織物の伝承教室が開かれた時、松本やエノさんから「柿の葉は雀隠れになりたぞや、おかた機織りやれや」という口誦を教えてもらつた。麻織りは、微妙な

「ズズメ隠れの柿の木」とはこれくらいだろうか
(桜井市下にて、筆者撮影)



柿の木から落ちると死ぬとか、けがをするとき難に遭う、柿の木で餅を焼いてはならない、屋敷に柿を植えてはいけないなどとするのは、柿を特別な木とするからだろ

樹だった。

柿の木から落ちると死ぬとか、けがをするとき難に遭う、柿の木で餅を焼いてはならない、屋敷に柿を植えてはいけないなどとするのは、柿を特別な木とするからだろ

る。木の芽の出る頃はノ(布)を織っていると糸が乾燥して、ビシビシ切れるので、この頃を春ハッシャギといった。そ

の後、柿の葉が十分にしげる頃が機織りにちょうどいいとして、こう言う

のだという。吉野の木地

師の集落篠原でも、山を

焼いて作ったハタ(切畑)

へ出かけるのは、ズズメ

が柿の木の若葉で見えな

くなる「ズズメ隠れ」の

頃だといった。機織りの

適期も、焼き畑の作業開始も柿の成長が教えてくれたのだった。柿がよく

寒るよう、「なるかな

らんか、ならんなら伐る

ぞ」とまるで人間に対す

るように、鉈で柿の木を

威嚇して、豊作を得よう

とする「成木責め」もか

つて正月に行われてい

た。
(奈良民俗文化研究所代
表) 次回は23日